

『千載佳句』所収白居易詩逸句考（上）

植木久行

序

大江維時おおえのりれとき（八八八〜九六三）が十世紀の半ばごろに編纂した唐代の七言詩の秀句集『千載佳句』（以下、『佳句』と略称）は、『全唐詩』未収の逸句を収める宝庫の一つである。花房英樹「綜合作品表」（『白氏文集の批判的研究』）（以後、花房本と略称）所収の終りに付載する「補遺作品」のなかには、作品番号3763から3784に到る22聯の逸句が、いずれもこの『佳句』、より詳しくいえば金子彦次郎校定本『佳句』のなかから収録されている。

『佳句』に収める白詩の逸句に関しては、校定本を収める金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集―句題和歌・千載佳句研究篇』⁽¹⁾（以下、金子本と略称）と、巖紹邊いわたせ「日本『千載佳句』白居易詩佚句輯考」⁽²⁾（以下、巖論文と略称）を除いて、校勘や訳注等の基礎研究が、従来ほとんどなされないままに今日に至っている。⁽³⁾ 本稿は、この欠を補うために執筆したものである。

なお本稿で採りあげる逸句を収めるものとしては、さらに朱金城『白居易集箋校』（以下、朱『箋校』と略称）や、陳尚君『全唐詩統拾』巻28（『全唐詩補編』中巻所収。以下、陳『統拾』と略称）がある。前者は花房本に拠ると明記しながら、私見による文字の改訂や誤植を含む。また後者は、大半の18聯を東京大学が所蔵する森鷗外寄贈の『佳句』の写本にもとづいて収録し、他の3聯（3766・3767・3769）は、『佳句』より少なくとも50年以上遅れて成立する藤原

公任編『和漢朗詠集』（川口久雄校注、岩波・日本古典文学大系本）に拠って収録する。

ところで『佳句』最古の写本は、佐倉の国立歴史民俗博物館所蔵の鎌倉期鈔本二帖（重要文化財、田中家旧蔵）である。この影印本は、国立民族博物館蔵「貴重典籍叢書」文学篇第21巻として、近々臨川書店から刊行予定（後藤昭雄解題）と聞く。⁴ また影印と翻字が「古典文庫」に収められる（太田次男解題）とも聞く。⁵ しかし現在のところ、いずれも未刊である。本稿では、島原松平文庫と国立公文書館内閣文庫に蔵される『佳句』を参照して校勘し、必要に応じてその異文を書き記した。また逸句のうち、『和漢朗詠集』にも収める⁶ 『七夕』詩については、すでに私見を発表済みであるので、本稿から除外した。なお島原松平文庫本などに付すヲコト点等の古い訓点にもとづく訓みについては、筆者の専門外に属するので、本稿では通常の訓読に従っている。この点、特に御了承いただきたい。本稿の底本には、花房本（＝金子校定本）を用いた。紙幅の都合上、本稿では『佳句』所収の逸句の約半分を扱いたい。

本 篇

● 3763 「早春閑行」 「鶯早乍啼猶冷落、花寒欲發尚遲疑」

「四時部・早春」 （『佳句』の部立。以下同じ） ○（訓読） 「早春の閑行」 「鶯は早くして 乍めて啼くも猶は冷落たり、花は寒くして 発かんと欲するも尚は遲疑す」 ○（通釈） 「初春のそぞろ歩き」 「鶯は（まだ初春で）時期が早く（て寒い）ので、ようやく鳴きはじめてたばかり、まだ（ほとんど聞こえず）ものさびしい。（春の）花は、（まだ初春で時期が早く）気候が寒いので、聞こうとして、まだためらっている」。

○（語釈） 「早春・閑行」 いずれも白詩の愛用語。平岡武夫・今井清編『白氏文集歌詩索引』（以下、『索引』と

略称。用例数は基本的にこの『索引』による（）によれば、それぞれ34例、27例を数え、「早春」の語は、詩題に用いられることが多い。ブラブラと閑かに行く「閑行」は、「閑遊」とともに、白居易にとって、きわめて積極的な価値を持つ行為であった。（乍）物ごとの発端にさかのぼって述べる副詞「初」の類語。やと……したばかり。白詩¹⁰ 264「正月三日閑行」（宝曆二年、55歳、蘇州での作）に、「黄鸝巷口鶯初語、烏鵲河頭水欲銷」とある。この初と欲の対は、本例の乍と欲の対にほぼ相当する。また上句は、本例の诗情と似かよう。（猶）下句の「尚」と対文（互文）同義をなす。（冷落）双声の形容語。下句の疊韻「遲疑」と対をなす。白詩には11例用いられ、その一つ²⁶⁴「和春深二十首」其二に、「荒涼三逕道、冷落四隣花」とある。ただしこの用例は、春の花が散りうせたさびしいさまを表わす。「花寒欲発……」同じく早春の趣を歌う白詩²⁸¹⁵「魏王堤」（大和四年、59歳、洛陽での作）中の一句「花は寒くして発くに懶く 鳥は啼くに慵し」は、本例と類似する発想である。（遲疑）白詩には2例あるが、こうした擬人化はない。

○（備考） 作成年代未詳。晩年の洛陽での作（『後集』か『統後集』所収）であろうか。季節の微妙な推移に敏感な白詩の特徴を、端的に示す一聯である。本聯はまた、春を「鶯花の月」と捉える白詩（^{2462・3309}）の诗情を、上下の二句に分けて表現したものと、と考えてよい。

●3764 「対酒当歌」「強來使住無禁老、暗去難留不奈春」

「四時部・送春」所収。○（訓読）「酒に対へば 当に歌ふべし」「強ひて来りて便ち住まる 老いを禁むる無し、暗かに去りて留め難し 春を奈んともせず」○（通釈）「美酒を飲んで大いに歌おう」「こちらが望まないのに無理やり（わが身に）訪れては、そのまま住まり続ける、（そんな）老いを止めるすべはない。知らぬまに去りゆきて引きとめがたい、（そんな）春をどうすることもできない」。

○〔語釈〕「対酒当歌」魏の曹操の著名な「短歌行」の、冒頭の一句そのままである。この詩題はまた、「酒に對ひ 歌に當たる(当ふ)」とも訓める。その場合、当は上の「對」と対文同義をなし、「ほかの人の歌を聴く」意となる。白詩には「対酒」「対酒吟」「対酒閑吟……」などの詩題はあるが、「対酒当歌」の例はない。すでに金子本(551頁)のなかに指摘されるように、『佳句』の詩題注記の方式は、かなりルーズである。従って本例も原題そのままかどうかは確定しがたく、むしろ「前後乃至は中間部を節略し」て注記した可能性が高い。(強) 松平文庫本は「あながち」と訓む。(便) そのまま。杜甫「兵車行」の、「或從十五北防河、便至四十西宮田」と同例。(禁) ここは仄声(去声)で止める意。ちなみに、耐える意の場合は平声である。(暗) 明らかでないこと。忍びやかに、人知れずの意。〔難留……〕白詩2240「落花」(大和三〇五年、58〜60歳、洛陽での作)に、「春を留むるに 春住まらず、春帰りて 人寂寞たり」とある。

○〔備考〕作成年代未詳。晩年の洛陽における、友人との宴席での作なのであろうか。ほぼ同じ発想の白詩3311「晚春 酒を携へて沈四著作(述師)を訪ねんと欲し……」(開成二年、66歳、洛陽での作)にこう歌う、「春を留め得る計無く、争でか能く老いを奈何せん(無計留春得、争能奈老何)」と。行く春に、老衰の忍びやかな到来を察知する。

●3765 「早夏閑興」「簟冷乍呈新気味、扇涼重叙旧恩情」

「四時部・首夏」所収。○〔校語〕内閣文庫甲本は、詩題の閑興を閑居に作る。ただし乙本は閑興である。○〔訓読〕「早夏の閑興」「簟冷かにして 乍めて新しき気味を呈し、扇涼しくして 重ねて旧き恩情を叙ぶ」○〔通釈〕「初夏の醸し出す、ゆったりとした興趣」「竹席は(肌ざわりが)ひんやりとして、ようやく(春の間では感じられない)新鮮な心地よい感触を表わしはじめ、団扇は風が涼しくて(氣持よく)、再び昨年の夏同様の情愛を見せは

じめた

○〔語釈〕〔早夏・閑興〕白詩にはそれぞれ7例、2例を数える。〔簾〕緑の竹を劈いて、その表皮を編んで作った夏の敷物。竹製のござ。和名はタカムシロ。熱い夏に寝台の上などに敷いて、なめらかで涼しい肌ざわりを楽しむ。白居易は、当時有名な蘄州(湖北省東端に近い長江ぞいの地)産の簾を愛用した。〔乍〕「初」とほぼ同意。前出。〔呈〕ある状況を發揮する、表わす意。〔気味〕味わい、気分、気持、性質、興趣などの意を持つ、白詩の愛用語。全27例。〔叙〕上句の「呈」と対文同義をなす。〔旧恩情〕旧は、かつての、昔の、ここでは昨年の夏を指す。また恩情とは、一種の擬人的表現。昨年の夏の間、団扇(うちわ)のおかげで快適に過ごせたことに對する感謝の気持ちをこめて表現する。恩情は情愛、特に肉親間の親愛や男女間の情愛を暗示する言葉。

○〔備考〕作成年代未詳。簾と団扇の使用開始を通して、初夏らしい独特の風趣を詠む。これも季節の変わり目に敏感な白詩らしい一聯であり、晩年の洛陽時代の作であろうか。

● 3766 「閨裴李二舍人拜綸閣」〔鳳池後面新秋月、竜闕前頭薄暮山〕

〔四時部・早秋〕と〔宮省部・禁中〕に重出。『和漢朗詠集』は、巻下の「禁中」に収める。○〔校語〕詩題の「裴」を、花房(Ⅱ金子)本、および柿村重松『和漢朗詠集考証』以下、川口・大曾根・菅野の各訳注本は、いずれも「裴」に誤る(裴の姓はない)。松平文庫本、および内閣文庫甲本・乙本(いずれも禁中の条)『佳句』には、正しく裴に作り、釈無名『和漢朗詠註抄』も裴に作る。花房本に拠る朱『箋校』は、ただちに「裴」字に改めて、まったく校記を施さない。この点は、陳『統拾』も同じである。なお大江匡房(一〇四一〜一一一一)の言談を筆録した『江談抄』第四には、詩題を「同裴李文(夫イ) 拜綸閣詩」に作り、文字に大きな異同がある。他方、寛明(信阿)『和漢朗詠集私注』(以下、「私注」と略称)や、前田侯爵家所蔵伝二条為氏筆本などは、「題東北旧院小亭」

に作り、「全然別箇の観のある詩題」（金子本41頁）である。この点について、花房本274頁は、二種の詩題を「一題をなすものであるうか」と推測する。『佳句』や『和漢朗詠集』における詩題注記の実態を考えれば、「聞裴李二舍人拜綸閣、題東北旧院小亭」というような詩題を、それぞれ分割して記した可能性もある。しかしここでは、ひとまず「聞裴李二舍人拜綸閣」に従って解釈する。

○〔訓読〕「裴・李二舍人の綸閣を拜するを聞く」「鳳池の後面は 新秋の月、竜闕の前頭は 薄暮の山」

○〔通釈〕二人の知制誥、裴と李が、中書舍人の職を正授されたことを聞く。「中書省の後方には、初秋の月が（早くも）のぼり、（大明宮の）丹鳳門の前方には、暮れかかる終南山の山脈がぼんやりと見える」

○〔語釈〕「裴李二舍人……」 釈無名『和漢朗詠註抄』にいう、「此ハ裴舍人・李舍人ト二人ノ人ノ、綸閣ト云フ官ニナレルヲ聞イテ、悦ビニ作リテ遣セル詩ナリ」と。裴・李の名は未詳。綸閣は、天子に代わって政策を立案し、詔勅の起草にあたる中央官庁「中書省」の雅名。『初学記』巻11、中書令第九の「事対」、綸閣の条に、「中書の職は綸誥（詔勅）を掌る。前代の詞人、因りて綸閣と謂ふ」とあるように、綸閣とは綸誥を掌る官署の意である。白詩0379「洛中の偶作」（長慶四年、53歳、洛陽での作）にいう、「二年 綸閣に直し、三年 刺史の堂」と。この上句は、白居易が元和十五年（八二〇）十二月二十八日、主客郎中・知制誥となり、翌長慶元年十月十九日、中書舍人を正授され、長慶二年七月十四日、杭州刺史となって転出する約二年間、中書省に宿直して緊急時の詔勅起草したことをいう。知制誥とは、制誥を掌る者の意で、他の官職につきながら詔勅を執筆する者をいう。これに対して中書舍人は、詔勅を執筆する正規の官であり（正五品上、定員六名）、「文士の極任、朝廷の盛選」と評された栄光あるポストであった。なお綸は「糸綸」と同意。いずれも『礼記』緇衣篇の「王の言は糸の如きも、其の出づるや綸の如し」を踏まえて詔勅を指す。白詩1227「紫薇花」（長慶元年、50歳、長安、主客郎中・知制誥在任）に、「糸綸閣下文書静、鐘鼓楼中刻漏長」と見える糸綸閣も、綸閣の別称である。「綸閣を拜す」の語は、単に「中書省を拜

す（川口久雄・奈良正一『江談証注』⁽¹⁸⁾）と訳しただけでは、意味が不明瞭である。拜は「朝廷官職ヲ授ルコト」（伊藤東涯『操觚字訣』巻10）をいう。唐代、知制誥を「舍人」と呼ぶこともできたので、こゝは、見習い役「知制誥」から正規の中書舎人に昇格したことをいうらしい。

〔鳳池〕 中書省の雅称。もと魏晉時代の中書省を意味した「鳳凰池」の略称である。南朝・齊の謝朓「中書省に宿す」詩（『文選』巻30）に、「茲に言 鳳池に翔れば、鳴珮 清響多し」とあり、五臣（李周翰）注に「鳳池は中書省なり」という。唐詩のなかに散見し（賈至「早朝大明宮……」など）、白居易も中書舎人から杭州刺史に転出する途中（長慶二年、51歳）、「昨夜 鳳池の頭り、今夜 藍溪の口り」⁽¹⁹⁾（『宿藍溪對月』）と歌っている。同じ赴任途中の作、1309「陽城駅に宿して月に対す」詩の、「鳳凰池上の月、我を送りて商山を過ぐ」⁽²¹⁾は、本例の上句の理解に有益である。「鳳凰池上の月」とは、都長安の東北部に突き出た唐朝後期の政治の中心「大明宮」内の、宣政殿の西側にあつた中書省で宿直したときに眺めた月を意味しており、中書省とは数百メートル以上も離れた大明宮内北部の「大液池」とは無関係の表現であろう。ちなみに鳳凰池とは、晋の荀勗が機密事項を掌る中書省の長官「中書監」から、行政府の長官「尚書令」に転任したとき、人々の祝辞に対して、「我が鳳凰池を奪ひぬ。諸君、（何ぞ）我を賀ふや」と慨嘆した故事（『晋書』巻39）にもとづく表現。従つて川口訳注本が、「鳳凰池の御池の後から初秋の月が出て水にうつる」と訳するのは、池の字にとらわれた誤りであろう。（後面）下句の「前頭」と対をなし、面と頭は、いずれも一種の接尾語。（竜闕） 宮闕・宮殿の意。書陵部本『朗詠抄』に「皇居ヲ云」、国会図書館本『和漢朗詠注』に「内裏ノ惣門ヲ云也」とある。また『和漢朗詠集永濟注』⁽²³⁾に「竜闕トイハ、内裏也。竜顔ノ君ノイマス処ナレハ、竜闕ト云也」ニ云々という。ここでは、大明宮、特にその正門「丹鳳門」を指そう。こうした「天子の居にいふ。竜を以て天に喩ふ」（金子元臣・江見清風『和漢朗詠集新釈』）とする旧来の解釈に対して、柿村『考証』は、漢代の都長安、未央宮の蒼竜闕を指すとす。この「新説」が一旦提出されると、川口・大曾根・菅野の

各訳注本は、いずれも柿村説に従うが、その誤りは明白である。この竜は、竜駕・竜顔などと同じく、天子に關係する事物に付された形容語にすぎず、「帝王の宮闕(宮門)」を意味する。皇宮の解は、その引申義である。ここではもちろん、上句「鳳池」の鳳と對をなす。初唐の許敬宗「奉和詠雨心詔」詩の、「激溜分竜闕、斜飛灑鳳樓」も、参考になろう。また皇宮を意味する「竜闕」は、盛唐の岑參「送韋侍御先婦京」詩などにも見え、白居易の親友、劉禹錫の「和僕射牛相公、以離闕庭七年……」(開成三年、67歳、洛陽での作)には、本例と同意の鳳池・竜闕の語を用いて、「久しく竜闕を辞して紅旗を擁し」、「幕客 風を追いて 鳳池に入る」と歌う。(山) ここでは都長安の南三、四十キロの地に、東西方向に走る長大な終南山(秦嶺山脈の中段部分)を指す。

○(備考) 作成年代未詳。本詩は、すでに大江匡房(一〇四一〜一一一一)在世当時の『白氏文集』のなかに見えなかった。このことを記す『江談抄』中の詩題「同裴李文(夫イ) 拝繪閣詩」を、「裴李文(裴李夫) と同じに繪閣を拝す」詩と訓むことができるならば、長慶元年十月十九日、中書舍人を拝命したときの作となろう(50歳)。元和十五年の歳末、主客郎中・知制誥に就任したときの作ではあるまい。ただし裴李文・裴李夫、ともに未詳である。一説に「同」を「同ず」(唱和する)と訓み、「裴李文が繪閣を拝する詩に和する」と訳す。

ちなみに、別の詩題「東北の旧院の小亭に題す」と見える「旧院の小亭」は、全く不明である。白詩1235「西省(中書省)の北院に新たに小亭を構へ……」(長慶元年、50歳、主客郎中・知制誥)の詩題に着目すれば、中書省内の院子にわのなかの建物を指すのであろうか。『和漢朗詠集和談鈔(詩注)』は、詩題を「題東北旧院小亭」とし、「後面ハ、東北ノ心也」と注する。他方、『和漢朗詠集仮名注』(以下「仮名注」と略称)は、「白居易若クシテヲハセシ時、内裏ニ仕ヘ玉フ時」の作とするが、確証に乏しい。

● 3768 「辱牛僕射一札、寄詩篇、遇物寄懷詩」「風雲聚散期難定、魚鳥飛沈勢不同」

「人事部・朋友」所収。○〔校語〕詩題の終り三字「寄懷詩」を、花房（＝金子）本は「寄懷情」に作り、陳『統拾』も同じ。しかし白詩には「寄懷」や「寄情」の言葉は見えるが、「寄懷情」の語はない。ここでは松原文庫本『佳句』に、「情」を「詩」に作るのに従う。この異文「詩」は、詩題中の言葉ではなく、「……という詩」ほどの意味であろう。後掲の類似した詩題377「辱牛僕射相公一札、兼寄三篇……」を参照すれば、「寄」のうえに「兼」字を脱するようである。○〔訓読〕「牛僕射の一札を辱うし、（兼ねて？）詩篇を寄せ、物に遇ひて懐ひを寄す」の詩、「風雲の聚散は 期定め難く、魚鳥の飛沈は 勢ひ同じからず」○〔通釈〕「かたじけなくも左僕射牛僧孺どのから一通のお書札をいただき、（あわせて）詩篇をお寄りいただいた。（その詩には）思いがけぬできごとで遭遇した心情がこめられている」詩、「雲が聚ると風が吹き散らすように、（官界で活躍できるよい）時期は、（あらかじめ予測して）定めがたく、水中に沈む魚、天空を飛ぶ鳥のように、（官界での）浮き沈みの状況は、人それぞれに異なっている」

○〔語釈〕〔辱〕ここでは受け取る意の謙讓表現。289の白詩は、「病中に張常侍の 集賢院に題する詩を辱うし、困りて以て継ぎ和す」と題する。（牛僕射）嚴論文が指摘するように、左僕射在任の牛僧孺（七八〇―八四八）を指す。左僕射は右僕射とともに、行政官庁「尚書省」の実質的な長官（尚書令は空席）である（從二品）。牛僧孺は、白居易にとって政治方面の庇護者であり、杭州刺史をやめた後、東都分司の職につけたのも、牛僧孺の尽力であった。〔寄〕人に託して離れている人に寄る意。〔遇物〕思いがけない事態や事物に出くわす意。白詩には6例ある。その一つ、0379「洛中の偶作」詩に、「物に遇ひて 輒ち一詠し、一詠 一觴を傾く」という。〔詩題〕少し省略されているらしい。「風雲聚散」ここは下句との関連から、『易』乾の卦の「雲は竜に従ひ、風は虎に従ふ」を踏まえつつ、政界で活躍できる機会（時勢）を長く持続できないことをいうか。牛僧孺は、いわゆる牛李の党争の中心人物の一人である。白詩0807「滑村に退居し、礼部の崔侍郎（群）・翰林の錢舍人（徽）に寄する詩」（元和九年、43

歳、下邳での作)に、「命は風雲の会に偶し、恩は雨露の霧たるよりも單し」とある。「聚散」とは、活躍できる機会が訪れたり去ったりする厳しい政界の現実を暗示しよう。ところで一聯の下五字「聚散期難定、飛沈勢不同」は前掲の白詩0807「渭村に退居し……」のなかに、わずか一字違いで「聚散期難定、飛沈勢不常」と見えている。(飛沈)官界での栄達と不遇を暗示。

○(備考) 敵論文は、後掲の3773「辱牛僕射相公一札、兼寄三篇……」の詩題のもとに本詩をも収め、連作三首中の二首と見なしている。『佳句』の詩題注記の実態を考えれば、その可能性も充分あるが、ここではしばらく陳『統拾』と同様に、それぞれ別箇の作と考えておく。

敵論文はまた、牛僧孺の僕射就任時について、『旧唐書』巻172の本伝に従って、①大和六年(八三三)十二月、中書侍郎・同平章事から、「檢校左僕射、兼同平章事」の官銜をもつ淮南節度使に転出した、②開成三年(八三九)九月、東都留守から左僕射に転任した、ことを指摘するが、本詩がそのいずれに該当するかについては言及しない。

ここで特に注目すべきことは、『劉白唱和集』⁽³⁴⁾五巻をもつ唱和仲間、劉禹錫の詩題中に、本詩と類似した呼称が見えることである。そのうち、「和僕射牛相公、以離闕庭七年……」や「酬僕射牛相公、晋国池(裴度の午橋莊)⁽³⁵⁾上別後、至甘棠館……」の詩は、開成三年(八三八)の作、「和僕射牛相公『春日閑坐見懷』」や「和僕射牛相公『寓言』」(二首)の詩は、翌開成四年の作である。劉詩の作成年代に関しては、卜孝萱『劉禹錫年譜』⁽³⁶⁾、高志忠『劉禹錫詩文系年』⁽³⁷⁾、蔣維宥⁽³⁸⁾はか『劉禹錫詩集編年箋注』など、みな同じ意見であり、瞿蛻園『劉禹錫集箋証』⁽³⁹⁾もほぼ同じである。これは敵論文の指摘する②の時、つまり『旧唐書』巻17下、文宗紀に従っていえば、開成三年九月二十三日、東都留守から左僕射に転任し、開成四年八月十四日、山南東道節度使に転出する期間内の作である。しかもこの期間以外に、牛僧孺を「僕射」と呼んだ例は、劉詩のなかにない。ちなみに、この約一年間、牛僧孺は宰相(相公)の職にはなかったが、彼は長慶三年(八三三)、戸部侍郎・同中書門下平章事となって以来、何度も宰相を

経験しているので「相公」と呼んだのであろう。

要するに、この白詩も劉詩と同じ開成三年九月以降、翌開成四年八月以前の作、と考えてよい。当時、白居易は67〜68歳、太子少傅分司に在任中である。いかえれば本詩は、牛僧孺が都長安から東都洛陽の白居易にあてて寄った詩に対する、白居易の唱和詩である。この逸詩は本来、大和三年(八四〇)から開成五年に到る洛陽での詩八百首を収めた『洛中集』十卷(開成五年十一月成立)のなかに収められていたはずである(後、會昌二年(八四二)に成る『白氏文集』七十卷本の「統集」に収録)。従来、ほぼ原形とされる『白氏文集』「七十卷」も、じつは一旦散佚した「廬山東林寺本七十卷」の復元をめざして、五代・後唐の李從栄が再編した杜撰なテキストにもとづくともいう。『統集』から漏れた詩は、案外多いのであろうか。

王夢鷗『唐代小説研究四集』⁽⁴¹⁾に収める牛僧孺の「年譜」開成三年の条には、彼が頼みとする宦官楊承和が処刑されて、新たに権勢をにぎった宦官仇士良は自分たちに好感を持たず、政情が不利になりつつあったことを指摘する。そうした政情の憂慮を表白した詩と察知した白居易が、八歳年下の牛僧孺を優しく慰めるために作詩したものでらしい。

●3769 「春詞」「莫怪紅巾遮面笑、春風吹綻牡丹花」

「人事部・美女」所収。「和漢朗詠集」は、巻下「妓女」に収める。○〔校語〕 釈信阿『私注』(室町期古写本(内閣文庫蔵)⁽⁴²⁾)や貞和本・岩瀬文庫所蔵延慶本等の『和漢朗詠集』は、「別後寄美人」(別後 美人に寄す)と題する。朱『箋校』は、紅巾を紅中に誤る。○〔訓読〕「春詞」「怪しむこと莫かれ 紅巾もて面を遮つて笑ふことを、春風吹き綻ばす 牡丹の花」○〔通釈〕「春の詞」「(彼女が)紅い(薄絹の)ハンカチで(羞じらう)顔をおおいかくしてにっこり笑うのを、見とがめないでほしい。(折りしも吹きよせる)春風が、(あでやかな)牡丹の花を咲かせた

(のだから)

○〔語釈〕〔春詞〕白詩には、「春愁に悩める女の状」(佐久節訳注)を描写した一首の「春詞」詩2597(大和三年、58歳ごろ、長安での作)が伝わる。その詩を参考にあげたい。「低花樹映小粧楼、春入眉心面点愁。斜倚欄干臂鸚鵡、思量何事不回頭」。本詩も、美女(宮女・妓女など)の魅力的な姿態や言動を歌っており、「春詞」の題で少しも違和感はない。「別れし後 美人に寄す」という詩題は、これに較べてやや劣るか。「莫怪」 従来、「美人の色 牡丹の花に喩ふ」(『私注』)、「是れ美人といふとも実は花とも見るべきもの」(柿村『考証』)との観点から、「窈窕たる美人が、紅の布を顔にあててうち笑むなるを、誤り認めて、春風の為に綻び初めたる牡丹の花にはあらずやと、怪しむことなかれ」(金子・江見『新釈』)、「美女が紅の布で顔を隠してにっこりしているのを怪しんではない。春風が牡丹の花を咲かせたのかなどと」(菅野訳)のように訳されてきた。これは、白詩152新楽府28「牡丹芳」のなかで、牡丹の花をあでやかな美女の姿態になぞらえた四句、「映葉多情隱羞面、臥叢無力含醉粧。低嬌笑容疑掩口、凝思怨人如断腸」を思い起こさせる。特にその傍点部、葉かげに見え隠れする花の悩ましげな様子を、はにかんで顔を隠す佳人の姿に、また愛くるしく傾き低れる花の様子を、袖やハンカチを口にあててほほえむ美女の姿にたとえた表現は、注目に値する。しかし本詩は牡丹の花を詠んだ作品ではなく、女性の魅力そのものを表現の中核にすえた「春詞」である。しかも白詩15例の「莫怪」のうち、二句一聯の初めに「莫怪」の語が置かれた場合、怪は上句の下に記されることがらを「とがめる」(責怪)意となり、下句にその理由を説明する句法を採るのが通例である。1006「編集拙詩、成一十五卷、因題卷末……」詩の「莫怪、氣粗言語大、新排十五卷詩成」を始めとして、「莫怪、独吟秋思苦、比君校近三毛年」(620「秋雨中贈元九」)、「莫怪、珂声碎、春来五馬(太守(刺史)の馬)驕」(2330「新春江次」)などは、こうした例である。本詩もこの用例を考慮して訳し、「疑フコトナカレ」(『仮名注』)などと見なす説には従わない。

〔紅巾〕 紅あかい巾きん。巾には①手巾てんかぢ、②領巾スカーフ、③布巾ぬのきれなどの意味があるが、ここは①の手巾(『仮名注』を指そう。ただ一般には、柿村『考証』以下、③の意味にとることが多く、川口詠注本は②を採る。唐代の宮女が紅い羅のハンカチ(紅手巾・紅帕子)を用いたこと、⁽⁴⁶⁾ および平岡武夫「白居易の山石榴花(つつじ)の詩」が、白詩0593「山石榴、寄元九」中の「紅綃の巾」を「妓女を飾る紅のうすぎぬ」と注していることも参考になろう。「紅巾」の語は、杜甫「麗人行」などにも見える。白詩の「山榴の花は紅巾を結ぶに似たり」(1356「題孤山寺山石榴花……」)と「紅葉が) 乱れ落ちて 紅巾を剪る」(2800「和杜録事題紅葉」)の二例は、①②③のどれでも通じるようである。〔遮面〕「美女の羞らひて、紅き巾を、面にあてて覆ふをいふ」(金子・江見「新釈」)。〔綻〕 裂けて開く意。ここでは、花のつぼみが開いて咲くことをいう。白詩1292「思婦の眉」に、「春風揺蕩として東より来り、桜桃を拆ひらき尽つくし 梅を綻はばし尽つくす」とある。「牡丹花」 晩春を彩る大唐の花、牡丹の愛好は、盛唐の都長安に始まり、中唐以後、爆発的な人気を得て、「花開き花落つること二十日、一城の人、皆狂みへるがごとし」(白詩「牡丹芳」(前出))などと歌われた。拙著『唐詩歳時記』⁽⁴⁸⁾142頁以下参照。こども、そうした牡丹の花の人気を背景とする。もちろん、美女と牡丹との絶妙な組み合わせは、天寶二年(七四三)、楊貴妃と牡丹のあでやかさを詠んだ李白の有名な「清平調詞」三首に始まる、といつてよい。本詩の発想も、その影響下にあろう。国会図書館本『和漢朗詠注』が「牡丹ノ花トハ、美人ノ面ヲ云也」と解釈するのも当然である。

● 3770 「任氏怨歌行」「燕脂漠漠桃花浅、青黛微微柳葉新」

「人事部・美女」所収。○〔校語〕 花房本(『金子本』)、朱『箋校』、陳『統拾』は、いずれも「任氏行」と題し、宋代の類書『錦繡万花谷』⁽⁴⁹⁾前集卷17、妓妾の条に引く、本聯と同じ作品中の逸句と目されるものも「任氏行」と題する。しかしここでは、わが承和六年(八三九)唐の開成四年)、遣唐使藤原常嗣が帰朝した際に将来された

「任氏怨歌行一帖白居易」の略称と判断し、原題にもどした。この「任氏怨歌行」一帖は、慈覚大師円仁が前年（開成三年）の八月から本年の二月に到る期間、長江下流の揚州で入手した聖教法具の類を、遣唐使一行に託して延暦寺に送った内容を記す「慈覚大師在唐送進録」（「僧円仁送本目錄」）⁽⁵⁰⁾ともいい、承和七年の正月、延暦寺の僧仁全・治哲の二人が筆録したもの）のなかに著録されている。太田晶二郎「白氏詩文の渡来について」⁽⁵²⁾は、「続古事談」（一二一九年ごろに成るとされる編者未詳の説話集）第一と第四に記される白居易の遺文「任子行」を「任氏怨歌行」に比定し、小島憲之「国風暗黒時代の文学中（上）——弘仁期の文学を中心として」⁽⁵³⁾677頁も、「佳句」の本聯を「任氏怨歌行」と同一視する。その説は妥当であろう。おそらく「李娃行」「鶯鶯歌」等の詩題（後述）との関連で略称「任氏行」が流布したのであろう。

○〔訓詁〕 「任氏怨歌行」「燕脂は漠漠として桃花のごとく浅く、青黛は微微として柳葉のごとく新たなり」

○〔通釈〕 「任氏の怨きの歌」「（彼女の頬には）燕脂がいちめんに薄く施されて、まるで淡い色の桃の花のよう。（目の上の）青黛はほっそりと微かに描かれ、あたかもみずみずしい柳の葉のよう」。

○〔語釈〕 「任氏怨歌行」 任氏は、徳宗の建中二年（七八二）に成る沈既済の有名な伝奇小説『任氏伝』の主人公——狐の変化した絶世の美女の名である。『太平広記』巻45に収める「任氏伝」は本来単行し、唐末の陳翰編『異聞集』（南宋初めの曾慥編『類説』巻28）のなかにも「任氏伝」として収められた。白居易は、単行する「任氏伝」を読んで作ったのであろう。ちなみに「怨歌行」といえば、『文選』巻27に収める前漢の成帝の側室、班婕妤の作が自然に思い起こされる。しとやかな才色兼備の彼女は、天子の寵愛が趙飛燕姉妹に移ると、みずから身を引いて、その失意の境遇を、季節の移ろいとともに捨てられる団扇のはかない運命に託して、「怨歌行」を作ったと伝える。『楽府詩集』巻42、相和歌辞・楚調曲の条に収める梁の簡文帝・江淹・沈約らの「怨歌行」は、班婕妤の作を受け、いずれも寵愛を失った女性の嘆きを歌う。本詩も、そうした楽府詩のイメージを受けつつ、献身的に仕えた愛

人鄭子の無理解な要請をことわりきれずに無残な死をとげた任氏自身の「怨情」(嘆きや不満など)を表現の中心にすえて歌ったのであろう。余田充「任氏伝」の一受容形態——『新撰万葉集』上巻秋10の解⁽⁵⁵⁾は、「任氏怨歌行」は「死んだ任氏が鄭子を怨む歌だったのかも知れない」と指摘するが、小島憲之『国風暗黒時代の文学中(上)』は、全く逆の場面、「死んだ任氏を嘆き恨む歌」(678頁)と見なしている。前者のほうが妥当であろう。

現在のところ確認されている「任氏怨歌行」の逸句は、『佳句』と『錦繡万花谷』のなかに収める八句四聯にすぎない。しかし本来は、かの「長恨歌」のように単独で話の筋を伝える内容をもった長篇作品であらう。この意味で『続古事談』第六、漢朝の条に記される「任子行」の梗概(後引)は、短いものながら貴重である。

本聯は、「容色姝麗な女妖任氏のでやかな姿」を詠んだ箇所にあたる(小島憲之『国風暗黒時代の文学中(上)』677頁)。「鄭子が美女に変化した狐の任氏と契るくだり」とする川口久雄『三訂 平安朝日本漢文学史の研究 中編』(489頁)の指摘も、沈既濟「任氏伝」の当該条に見える任氏的美貌の描写——任氏は粧を更めて出で、酣飲して歎を極む。夜久しくして寝ぬ。其の妍姿(あてやかな容姿)美質、歌笑の態度、举措(たちいふるまい)皆艶にして、殆んど人の世の有る所に非ず——を指すのであろう。要するに、一説の指すところは同じであり、本聯は絶世の美人任氏の容貌を描写した条、と考えてよい。

〔燕脂〕 烟脂・燕支・焉支なども書き、頬や唇にぬる紅い顔料(紅粉・朱粉)を指す。もちろん、ほお紅を主とする。これは、紅藍で粉を染めた化粧具であり、燕支粉ともいう。白詩¹²²⁸「後宮詞」(長慶元年、50歳、長安での作)には、「三千の宮女 燕脂の面」とある。紅藍の産地は甘肅省の燕支(焉支) 山付近とされ、「涼州の緋色は天下の最(第一)」と評された。〔漠漠〕 かすみつつ一面に広がるさま。見定めがたくあたりをおおうさま。下句の微微と対をなし、小島憲之の前掲本は、それぞれ「漠々」「微微」と訓む。白詩⁰⁷⁹⁶「贈内」の「漠漠閨苔新雨地、微微涼露欲秋天」(「佳句」四時部・晩夏所収)も、同じ重言(疊語)を対に用いる。〔桃花〕 『文鏡秘府論』東巻

「筆札七種言句例」に見える作者未詳の一聯に、「桃花の頬ほほに似たるを訝いぶり、柳葉の眉まゆの如きを笑ふ」とあるのは、本聯と同じく頬と眉をそれぞれ桃花と柳葉で形容した表現である。「青黛せいはい」翠眉すいび・緑眉りくびの類語。当時の眉墨まゆぼくは、インディゴ（インド産の植物から採った染料）やラピス・ラズーリー（青金石。アフガニスタン東北部が主産地）を材料とした螺黛らたい（円錐形の黛の固まり）であつたらしい。「微微」ほのかではっそりと美しいさま。延喜十三年（九一三）の序を持つ『新撰万葉集』下巻・恋歌に、「任氏顔貌彷彿真、粉黛不無眉似柳」とある。この下句は、すでに小島憲之『古今集以前』（塙書房、一九七六年）に指摘されるように、本聯の下句「青黛……」と類似しており、おそらく白詩を踏まえて作ったものであらう。同書はその下句を「粉黛無なきにあらず 眉 柳に似たり」と訓む（272〜273頁）。ちなみに眉を淡く画く化粧法は、中晩唐の張祐ちやうゆう「集靈台二首」其二（號夫人）の、「却嫌脂粉汚顔色、淡掃蛾眉朝至尊」、晩唐の韓偓かんわ「忍笑」の、「宮様衣裳淺画眉、曉來梳洗更相宜」などが参考にならう。「柳葉」白詩2672「和春深二十首」其二十にも、妓女の容姿を描写して、「眉は楊柳の葉を欺あそぶく」という。劉禹錫の詩（「同樂天和微之深春二十首」其七）には、「人の眉は 柳葉新たなり」とある。

○〔備考〕 沈既済の「任氏伝」が作られた建中二年は、白居易10歳のときである。近藤春雄『唐代小説の研究』⁽⁵⁷⁾386頁以下には、本詩の作成年代を、「任氏伝」の流布後、かなり年月が過ぎた後、白居易が「王昭君二首」（貞元四年（七八八）作、17歳）を作ったころの作ではないか、と憶測してこういう。「というのは王昭君の物語に感じて、それをうたにした白楽天には、また当時の物語にも感じて、それをうたにする興味がわいていたと考えられる」と。この指摘は興味深い。

ところで周知のごとく、白居易や元稹らのグループには、伝奇小説「伝」と詩（歌行（物語詩））とを対たいにした作品群、元稹「鶯鶯伝」（貞元二十年（八〇四）の作）と李紳「鶯鶯歌」、白行簡「李娃伝」（貞元二十一年？の作）と元稹「李娃行」、陳鴻「長恨歌伝」（元和元年（八〇六）の作）と白居易「長恨歌」などが伝わる。「任氏怨歌行」と沈

既済「任氏伝」の組み合わせも、そうした文学的傾向の一種と捉えうるであろうが、伝と歌との作成時期がかなり離れていること、および親友の伝(物語)との組み合わせではないことの二点は、大きな異同である。前掲の近藤説に大きな誤りがないとすれば、白居易の「任氏怨歌行」の作成こそ、後に彼らのグループ間で伝と歌とを対にした文学活動を行なう契機を導いたものとして注目されてくる。いずれにせよ、元和元年に成る「長恨歌」よりも遅い作品ではあるまい。「任氏怨歌行」は、一方では単篇で流布しつつ、他方では当然、元和十年(八一五)の十二月に成る白居易の自撰詩集十五卷(江州での編纂。八百余首)のなかに収録されたはずの作品である。しかし白居易みずから習作時の艶治で未熟な作品として廃棄し、意識的に自撰詩集のなかに入れなかった可能性もあろう。

●371 「任氏怨歌行」「玉爪蒼鷹雲際滅、素牙黄犬草頭飛」

「遊放部・遊獵」所収。○〔校語〕 『佳句』には本聯の作者名を欠くが、同じ『佳句』中の同じ題名「任氏行」(前条370)の注記「白」との関連、および『統古事談』第一・第五の記事から、「蓋し同一詩に属する」「楽天の作」(金字本445・440頁)と判断され、花房本274頁もその考えを肯定する。きわめて穏当な説であろう。詩題「任氏行」を「任氏怨歌行」に訂正した理由は、前条の〔校語〕参照。○〔訓読〕「玉爪の蒼鷹 雲際に滅え、素牙の黄犬 草頭に飛ぶ」 ○〔通釈〕 きらめく白玉のような鋭い爪をもった蒼鷹が、(獲物をねらって天空高く)雲のかなたに消えうせ、輝く白絹のような鋭い牙をもった黄犬(獵犬)が、草むらのなかから飛び出して(任氏に)襲いかかった」 ○〔語釈〕 ○本条は、鄭子が任官して赴任する途中、同道を強いられた任氏が獵犬に襲われて死ぬクライマックスを詠んだもの。「任氏伝」にいう、「是の時、西門の圜人(牧畜担当の役人)は、獵狗を洛川(渠)に教ふること、已に旬日なり。適ま道に値ひ、蒼犬 草間より騰り出づ。鄭子は、任氏の歟然ち地に墜ち、本形(本来の狐の姿)に復して南に馳するを見る。蒼犬 之を逐ふ。……里余にして犬の獲る所と為る」と。『統古事談』第六、漢朝

の条に見える「任子行」の梗概には、こういう、「狐ノ女、人トナリテ男ニアヒケルヲ、カノ男フカク愛念シテ、シバラクモハナレジトシケル程ニ、カリバヘイズルトテ馬ノ前ニノセテケリ。ヨキ犬ヲグシタリケルガ、コノ女ノ狐ナル事ヲ知テ、トピアガリテクヒヲトシテケリ」と。若干「任氏伝」と話の筋が異なる点は注意されてよい。

〔蒼鷹〕 鷹狩の鷹を指す。六朝の民歌（作者未詳）「孟珠」に「馬を走らせて蒼鷹を放つ」とある。また唐の岑参「衛節度（伯玉）の赤驃馬の歌」の、「草頭の一点 疾きこと飛ぶが如く、却つて蒼鷹をして翻つて後に向らしむ」は、本聯と類似した表現をもつ。ちなみに、津阪東陽『夜航詩話』巻四には、「蒼は灰惨色を謂ふ。……蒼鼠・蒼鷹は、皆老物を謂ふ」とあり、これも老練なイメージを添えるであろう。（雲際） 雲間・雲外の類語。陳子昂「白帝城懷古」詩に、「古木生雲際、帰帆出霧中」とある。（素牙） 素い牙とも訳せるが、「玉爪」との対を考えれば、「素（光沢ある絹糸・白絹）のごとき牙」の意であろう。（黄犬） 獵犬の意。「任氏伝」中の「獵狗」は「蒼犬」と表現され、「黄犬」ではない。黄犬の語は、『史記』巻87、李斯列伝中に見える。秦の丞相李斯は、罪を得て処刑される時、わが子に向かって、「吾 若と復た黄犬を牽いて上蔡（県名。李斯の故郷）の東門を出でて、狡兔を逐ふこと、豈に得べけんや」と嘆いた。白詩328「九年十一月二十一日感事而作」（大和九年、64歳、洛陽での作）のなかの「黄犬」の語も、同じ李斯の言葉を踏まえている。（草頭） ここでは「草の頭」の意で、「任氏伝」の「草間」にあたる。前掲の岑参詩にも見える。（飛） ここでは「任氏伝」の「騰り出づ」にあたる。

○〔備考〕 陳「統拾」が『錦繡万花谷』から収録した「任氏（怨歌）行」の逸句二聯は、「蘭膏新淋雲鬢滑、宝釵斜墜青糸髮」「蟬鬢尚隨雲勢動、素衣猶帶月光來」である。いずれも任氏の美しい容姿を描写する。ところで『錦繡万花谷』前集巻17、妓妾の終り「詩」の条には、この四句二聯を続けて記し、割注で「任氏伝」とのみ記し、作者名を欠くが、白居易の作と見なした陳尚君の判断は妥当であろう。

● 3772 「閨情」「煙攢錦帳凝還散、風卷羅帷掩更開」

「人事部・艶情」所収。○(訓読)「閨情」「煙は錦帳を攢ちて凝りて還た散じ、風は羅帷を巻いて掩ひて更に開く」○(通釈)「孤独な婦人の怨情」「(冷たい)煙霧が(閨の窓や入口にかかる)美しい錦織りの帳を通して(中にしのびこみ)、凝まったり散ったりしています。(無情な)風が(寝台のまわりの)羅の帷を巻きあげ、閉じたり開いたりしています」

○(語釈)「閨情」六朝以来、女性が一人さびしく閨房のなかで帰らぬ夫を待ちながら悲しみ嘆く心情を詠む。

初唐の『芸文類聚』巻32、人事部には、「閨情」の部立を設け、梁の王筠「閨情(詩)」などの詩を収める。「煙」ここでは霧やモヤ。「攢」金子本は通常の訓み(聚也)に従って「アツメ」と訓む。しかし下句の「巻」との対を考えると、「鑽」(平声)に通じて「刺す」「穿つ」の意味、引申して進入する意であろう。「錦帳」華美な帷帳。白詩に三例あるが、女性の部屋に用いた作例はない。ここで注目されるのは、『和漢朗詠集』巻下、716(715)番に収める「嫌ふらくは錦帳を巻けて長く麝を薫するを」という句である。これは白居易の逸句とも伝えるが、島田忠臣もしくは菅原文時ふぐみの作とも伝える作品である。侍女に「錦帳」をかかげさせながら、いつまでも衣に麝香じやうを薫きしめて閨房へやから出てこない様子を歌う。これによれば、本聯の錦帳も閨房の出入口、もしくは煙霧との関係で窓べなどにかげられた美しいカーテンの類を指すことになろう。(凝還散)還は下句「掩更開」の更と対文同義をなし、……したり、……したりする意。前後の動詞は、一般に反意語を用いる。白詩091「尋李道士山居……」の「尽日行還歌、遲遲独上山」は、その一例。ちなみに、本聯と同じ還と更を用いた作例に、『玉台新詠』巻7に収める邵陵王しやうりやう(蕭)綸「代旧姬有怨」詩の、「怨黛舒還斂、啼粧拭更垂」がある。「羅帷」寝台の周囲をとりまくカーテンの類。李白「春思」の「春風不相識、何事入羅帷」は、名高い。

○(備考) 作成年代未詳。孤独な女性の怨情を、夫の訪れないさびしい閨房の叙景を通して間接的に訴える。

煙と風は夜霧と夜風であらうか。

● 3773 「辱牛僕射相公一札、兼寄三篇寄懷。雅意多興味。亦以三長句、各繼來意、次而和之」「憂悲欲作煎心火、榮利先為翳眼塵」

「人事部・感興」所収。○(校語) 花房本(〓金子本)、朱「箋校」、陳「統拾」は、いずれも「各繼來意」を「各各繼來意」に作る。しかしここでは松平文庫本や内閣文庫甲本・乙本に従って、重なる「各」の一方を衍字と見なして削った。また金子本や松平文庫本には、詩題の冒頭「辱牛僕射」の右辺に「遇物イ」の注記がある。この異文「遇物」は、前出3768の詩題を参照すれば、「三篇」の下に入る脱字を示唆するのではなからうか。とすれば、当該箇所は「兼寄三篇、遇物寄懷」となる。すでに述べたように、嚴論文は本詩を前出3768と連作三首中の二首と見なす。この異文もその傍証の一つと見なせようが、まだ確定できない。ここでは、ひとまず別箇の詩として扱う。ただし作成年代は、両詩ともほぼ同じ時期である(後述)。○(訓読) 「牛僕射相公の一札を辱うし、兼ねて三篇を寄せて、(物に遇ひて?) 懐ひを寄す。雅意 興味多し。亦た三長句を以て、各の來意を繼いで、次して之に和す」「憂悲は心を煎る火と作らんと欲し、榮利は先づ眼を翳ふ塵と為る」 ○(通釈) 「左僕射牛僧孺閣下の一通のお書札を拝受、あわせて三篇の詩を寄って下さり、(思いがけないできごと遭遇した) 懐ひがこめられています。貴殿の表白された詩意は深い味わいに満ち、私も三篇の七言詩で、それぞれお寄せ下さった趣旨を繼承し、順序に従って唱和します」「心配や悲哀は、ほどなく心をじりじりと煎りたてる炎となりましょうし、榮達や利益は、早くも(物ごとの真実を見ぬく) 眼をおおいかくす土ぼこりとなりました」

○(語釈) 「牛僕射相公」 牛僕射とは、左僕射に就任した牛僧孺を指す。詳しくは前出の詩3768番参照。相公は、宰相経験者に対する尊称。「雅意」 雅は相手に対する敬称。高雅なみこころ。「長句」 七言句(詩) (作) 下句

の「為」と対文同義。くになる。（火）ここでは、心を迷わし苦しめる煩惱を暗示。白詩^{354b}「毛仙翁を送る」に「愁腸 火の煎るが如し」とあり、0447「朱陳村」に「悲火 心曲を焼く」という。（煎）金子本は「やく」と訓む。（先）とくに、すでにの意。（塵）ここでは、悟りを妨げ心を汚す種々の欲望「六塵」を暗示する。

○（備考）本聯は、すでに金子本44頁に指摘されるように、白詩1158「春に感ず」（元和十五年（八二〇）49歳、忠州での作）の、「憂喜は皆心の火、栄枯は是れ眼の塵」と酷似する。また本詩は、「牛僕射」の呼称から、前出の詩3768と同時期、つまり開成三年（八三三）九月以降、翌開成四年八月以前の作、と考えられる。当時、白居易は67〜68歳、太子少傅分司在任。それは、「感春」詩の作成から、18〜19年後のことであり、都長安から寄けられた牛僧孺の詩に対する唱和詩である。

注1 藝林舎、一九七七年再版。

2 『文史』第三輯、一九八四年所収。

3 たとえば3783「題新澗亭」詩は、白居易の作ではなく、劉禹錫の作と考えるべきである。統稿参照。

4 同巻には、田中家旧蔵の重要文化財『白氏文集』巻8・14・35・49、『白氏後集』巻59と、高松宮旧蔵の重要文化財『新樂府』上巻の古鈔本が収められる予定である。

5 太田次男『千載佳句』から「和漢朗詠集」へ―白詩を中心として―（汲古書院刊、和漢比較文学叢書4『中古文学と漢文学Ⅱ』所収）による。

6 今井源衛先生華甲記念・在九州国文資料影印叢書（第一期、一九七九年）所収。このテキストに関しては、金原理『平安朝漢詩文の研究』（九州大学出版会、一九八一年）に収める「松平文庫本『千載佳句』について」参照。

7 内閣文庫には、近世初期写（一冊、二〇七函二二九号、和学講談社旧蔵）と、近世中期写（二冊、二〇七函二二二一―二二三一号、昌平坂学問所旧蔵）の二種を所蔵する。いま川口久雄『三訂 平安朝日本漢文学史の研究 中篇』（前出）483頁に従って、前者を甲本、後者を乙本と略称する。この略称は、注（6）の金原論文にも同じく用いられて

（未完）

い。

- 8 『中国詩文論叢』第十六集（一九九七年）に収める拙稿『和漢朗詠集』所収唐詩注釈補訂（十）参照。
- 9 仮名遣いは、訓読の和訓のみ歴史的仮名遣いとし、その他はすべて現代仮名遣いを用いた。
- 10 盧潤祥編著『唐宋詩詞常用語詞典』（湖南人民出版社、一九九一年）、江藍生・曹広順編著『唐五代語言詞典』（上海教育出版社、一九九七年）など参照。
- 11 この点は、森岡ゆかり『千載佳句』『和漢朗詠集』所収許渾詩本文をめぐって（『汲古』第37号、二〇〇〇年）にもこういう、「佳句」の詩題は、他（のテキスト）と比べて大きな差異があるのは、一部あるいは後半を略した備忘録風な短いものがあることだ」と。
- 12 拙稿『和漢朗詠集』所収唐詩注釈補訂（四）（『中国詩文論叢』第十集、一九九一年）参照。
- 13 大曾根章介・堀内秀晃共著『和漢朗詠集』（新潮社、一九八三年）。
- 14 菅野禮行『和漢朗詠集』（小学館、一九九九年）。
- 15 伊藤正義ほか『和漢朗詠集古注釈集成』第一卷（大学堂書店、一九九七年）所収。
注（15）と同じ。
- 16 堀部正二編著、片桐洋一補『校異和漢朗詠集』（大学堂書店、一九八一年）による。
- 17 勉誠社、一九八四年刊。
- 18 岑仲勉「翰林学士壁記注補」六、蕭俛の条（同『郎官石柱題名新考証（外三種）』上海古籍出版社、一九八四年所収）参照。
- 19 唐の杜佑『通典』巻21、職官典3にいう、「以中書省地在枢近、多承寵任。是以人固其位、謂之鳳凰池焉」と。
- 20 松浦友久編『漢詩の事典』（大修館書店、一九九九年）341頁以下参照。
- 21 注（15）の第二巻上（一九九四年）所収。
- 22 注（15）の第三巻（一九八九年）所収。
- 23 山根対助・後藤昭雄『江談抄』第四（岩波書店、一九九七年）も同じ。

- 25 拙著『唐詩の風景』（講談社・学術文庫、一九九九年）88頁以下、注（21）『漢詩の事典』323頁以下参照。
- 26 この「詩」は、『和漢朗詠集和談鈔（詩注）』（注（23）所収）に見える「題東北旧院小亭詩」と同様に、単なる添え字であろう。
- 27 川口本の頭注と「出典一覽」の返り点、および柿村『考証』は、この立場である。
- 28 唱和を意味する「同」とその展開については、趙以武『唱和詩研究』（甘肅文化出版社、一九九七年）に詳しい。それによれば、初見は南齊末の謝朓の詩とする。
- 29 注（24）の書や、後藤昭雄ほか『類聚本系 江談抄注解』（武蔵野書院、一九八三年）。
- 30 注（15）の第二巻下（一九九四年）所収。
- 31 書陵部本『朗詠抄』も同じ。
- 32 堤留吉『白楽天研究』（春秋社、一九六九年）161頁参照。
- 33 『旧唐書』巻17下、文宗紀には、検校右僕射に作る。
- 34 橋英範『劉白唱和詩研究序説』（広島大学文学部紀要第五五巻特輯号三、一九九五年）参照。
- 35 拙著『唐詩の風景』150頁以下参照。
- 36 中華書局、一九六三年。
- 37 広西人民出版社、一九八八年。
- 38 山東大学出版社、一九九七年。
- 39 上海古籍出版社、一九八九年。
- 40 岡村繁『白氏文集』の旧鈔本と旧刊本（『東方学会創立五十周年記念 東方学論集』東方学会、一九九七年所収）参照。
- 41 台湾・芸文印書館、一九七八年。
- 42 山内潤三ほか編、新典社（一九八二年）の影印による。
- 43 枋尾武編著、臨川書店（一九九三年）の影印による。

- 44 注(17)と同じ。
- 45 松浦友久『中国詩歌原論』(大修館書店、一九八六年)所収の「唐詩に表われた女性像と女性観」参照。
- 46 吳企明「王建『宮詞』札^{さし}逐^い」(同『唐音質疑録』上海古籍出版社、一九八六年所収)参照。
- 47 同『白居易―生涯と歳時記』(朋友書店、一九九八年)所収。
- 48 講談社、学術文庫、一九九五年。
- 49 明の嘉靖刻本(上海辞書出版社、一九九二年影印)による。
- 50 竹内理三編『平安遺文』第八卷〇四四四八番所収。
- 51 嚴論文には少し誤解がある。
- 52 『国文学解釈と鑑賞』第21巻6月号、一九五六年所収。
- 53 塙書房、一九七三年。
- 54 柳澤良一「『新撰朗詠集』注解稿(七)」(『金沢女子大学紀要(文学部)』第一集、一九八七年所収)の75番参照。
- 55 『四国女子大学紀要』一卷二号、一九八二年所収。
- 56 『魏書』巻26、尉古真伝に付す^い聿^いの条。
- 57 笠間書院、一九七八年。
- 58 前野直彬『中国小説史考』(秋山書店、一九七五年)168頁や、李宗為『唐代伝奇』(中華書局、一九八五年)など参照。
- 59 『類説』巻28、『異聞集』の条に引く「任氏伝」には、西門を「西州」に作る。
- 60 『楽府詩集』巻49、西曲歌所収。